

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 8 月 31 日現在

機関番号：34428

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K11769

研究課題名(和文) 特別養護老人ホームにおける感染リスクマネジメント教育プログラムの開発

研究課題名(英文) Development of an infection risk management education program in nursing homes

研究代表者

松田 千登勢 (Matsuda, Chitose)

摂南大学・看護学部・教授

研究者番号：70285328

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は特別養護老人ホームの看護職を対象とした「感染リスクマネジメント教育プログラム」を開発することである。教育プログラムは感染管理に関する講義と、参加者が自施設での感染管理の課題とその対応を検討・実施するグループワークで構成した。参加者は講義には37名、グループワークには5名であった。その結果、参加者は自施設の状況整理し、他者に語る中で新たな課題を見出し、取り組みに対して他の参加者や感染看護の専門家から根拠を含めてアドバイスをもらうことで対応の方向性を見出した。

研究成果の概要(英文)：This study aimed to develop an infection risk management education program for nurses working in nursing homes. The education program consisted of a lecture on infection control and group work wherein the participants discussed the issues of infection control in their facilities and strategies for addressing them. Thirty-seven nurses attended the lecture, and most expressed satisfaction with it. Five nurses participated in the group work. As a result, the participants evaluated the current status of infection control practice in their facilities, and identified new issues through discussion with other participants. They also found ways to address these issues by obtaining advice (including rationales) from other participants and infection control specialist nurses. Our results showed the education program to be effective.

研究分野：老年看護

キーワード：特別養護老人ホーム 感染管理 教育プログラム

1. 研究開始当初の背景

高齢化に伴い、特別養護老人ホームに入所している高齢者の9割が認知症を有し、要介護度の平均は上昇するなどますます重度化の傾向となっている。また、複数の慢性疾患を持ち、胃ろうによる経管栄養、膀胱留置カテーテル、喀痰吸引などの医療処置を必要とする人も多い。そのため、加齢による感染症の罹患だけでなく、医療処置からの感染症を引き起こすリスクも高くなると推測される。また、「生活の場」といわれる特別養護老人ホームにおいて感染症が発生した場合、高齢者が集団で生活を送る環境のため、感染症が伝播しやすい状況にある。それらの感染のリスクを全て予防することは不可能であり、その中でリスクを最小限に抑えることが重要となる。そのため、医療専門職である看護師が中心となって、感染対策を施設全体で、組織的かつ継続的に行っていく役割を發揮することが求められている。このような状況の中で、2012年～2015年に「特別養護老人ホームにおける看護師が実践する感染症リスクマネジメント指標の開発」の研究を実施した。全国の特別養護老人ホームの感染管理の実態調査を実施した結果、看護師は感染管理に対して「これでいいのか」と日々葛藤し、「知識を得たい」という要望が明らかとなった。また、特別養護老人ホームの看護師を対象にした半構成質問紙面接調査の結果をもとに作成した「感染リスクマネジメント指標」を作成した。これらをもとに、特別養護老人ホームの看護師が中心となってよりよい感染管理を実施していくための感染管理の教育プログラムを考案する必要があると考えた。

2. 研究の目的

本研究の目的は、独自に開発した「感染リスクマネジメント指標」をもとに、特別養護老人ホームの看護師を対象にした「感染リスクマネジメント教育プログラム」を開発し、評価することである。

3. 研究の方法

1) 「感染リスクマネジメント教育プログラム」の試案作成

特別養護老人ホームの感染管理に対する事態調査結果をもとに、「感染リスクマネジメント教育プログラム」の試案を作成した。その内容は、特別養護老人ホームにおける感染管理に対する知識を提供する講義と、「感染リスクマネジメント指標」を活用したグループワークで構成するものであった。講義に対しては、感染管理の看護教員、施設で働く感染管理認定看護師などの専門家に実施してもらうこととした。グループワークの具体的方法は、各施設の感染管理の課題を振り返る、それに対する取り組みを考えてもらう、実際に取り組んだ結果に対してグループワークを通して意見交換とした。

感染リスクマネジメント教育プログラムの試案に対して、老年看護、感染管理の専門家に意見を聞き、修正を行った。

2) 感染リスクマネジメント教育プログラムの実施と評価

「感染リスクマネジメント教育プログラム」は感染管理に関する講義を第1回とし、第2回から第5回は独自に作成した「特別養護老人ホームの看護師が実践する感染管理指標」に基づき、参加者が自施設で感染管理の課題とその対応を検討したものを互いに検討しあうグループワークを実施した後、自施設でその対策を実践し、評価・修正していく研修とした。

「感染リスクマネジメント教育プログラム」の案内を0府内377施設に送付した。講義に参加した37名の看護師に対し、終了後にアンケート調査を実施した。2回目以降のグループワークの参加者は、第1回の講義参加者のうち本研究に協力が得られた5名であった。感染管理の課題とその取り組みについては作成した用紙に記入してもらい、現状や取り組み結果を写真撮影し、提示することに許可を得たのちで活用した。グループワークの内容は許可を得て録音し、逐語録を作成した。分析方法は記入した用紙の内容と逐語録から課題とその取り組みについて整理した。また、終了後にはグループワークに対するアンケート調査を実施した。

4. 研究成果

1) 「感染リスクマネジメント教育プログラム」の作成

2014年度に実施した「特別養護老人ホームで看護師が実践する感染管理指標案」の妥当性を問う調査の結果を基に、教育プログラムで活用する指標を作成した。それは、それぞれの項目に対して、特別養護老人ホームの看護職が実践する感染管理の内容として、「適切である」「ほぼ適切である」「あまり適切でない」「適切でない」の4段階から該当するものを選択してもらい、「適切である」「ほぼ適切である」を選択したものの割合を計算し、0.8以上を妥当性ありとした。その結果を基に0.8以下の項目を削除し、項目の表現に対する意見を参考に修正した。

28年度に実施するための教育プログラムのために、特別養護老人ホームの看護師に教育プログラムに対するニーズについてグループインタビューを行った。それを参考に、講義形式と3回にわたるグループワークおよび自施設での検討を繰り返すプログラムを考案した。その内容として、講義では「スタンダードプリコーションについて」「高齢者施設における具体的な対策」「高齢者施設の感染管理のシステム作りについて」である。グループワークの第1回は自施設の感染管理の状況をグループメンバーで共有を図る。それらに内容を参加者が施設に持ち帰り、自施

設の感染管理の課題を見出してもらう。第2回目は見出した課題を発表し、課題への対策の糸口を見出すグループワークを実施する。研修後、それらの結果をもとに自施設で、課題に対する対応を計画し、実施してもらう。第3・4回目は課題に対する対応の実施結果を発表してもらい、グループワークにより評価を行うというものである。

2) 感染リスクマネジメント教育プログラムの実施と評価

教育プログラムの第1段階の講義は9月10日(土)に37名の参加者を得て、3名の講師で実施した。プログラムの内容は「感染対策の基本：スタンダードプリコーション」、感染管理認定看護師による「高齢者療養病棟における感染の問題と感染管理」、「特別養護老人ホームにおける看護師が実践する感染症リスクマネジメント指標の開発」であった。その結果、ほとんどの人が講演の内容はわかりやすく、場所や時間の設定もよいという評価であった。自由意見として、「自施設の感染管理を振り返る機会となった」、「講義の中であった工夫を取り入れたい」などがあつた。

講義に参加した人を対象に教育プログラムの4回のグループワークへの参加を募った結果、5施設が参加協力に応じた。

1回目(2016年10月29日)は、自施設の感染管理の状況の共有を図る、それをそれぞれの施設に持ち帰ってもらい、課題を見出してもらうことを目的で、ディスカッション形式で実施した。参加者は自施設の状況を語る中で、課題を見出し、対応のアドバイスもらうなど方向性を見出していた。

2回目(2016年11月26日)は見出した課題を発表し、課題への対策の糸口を見出すグループワークを実施した。参加者が挙げた施設の感染管理の課題は、「感染対策委員会が単独でない」、「スタッフの手洗いなどの徹底ができていない」、「介護職が過剰に感染管理に反応する」、「排泄援助における感染管理に関する課題」、「施設で活用している消毒薬や加湿器の効果」などであった。施設の状況を撮影した画像を用いてグループワークを行ったことで、新たな課題として排泄援助の物品を入れるバケツの管理といった物品の管理や環境整備の問題について取り上げることができた。

3回目(2017年2月18日)は参加者の要望により、取り組みの途中経過の報告および対応に対するディスカッションを実施した。課題の取り組みとして、手洗いを確認するための器械を保健所から借りて、職員の手洗いのチェック行ったり、排せつ援助のワゴンの整理を行うなどの具体的な対応がみられた。また、各施設の取り組みを参考にし、改善策を考えていた。1・2回目には感染の専門家が不在だったため、質問をまとめ、専門家に回答してもらったものを送付した。

4回目(2017年5月27日)は今までの課

題に対する結果を発表し、意見交換を行った。1名は職員に対して独自のアンケートを実施し、取り組むの前後の職員の感染管理の認識の変化を明らかにした。その結果、感染管理への意識向上が見られた。1施設は職員の入りに擦り込み式アルコール消毒をおき、対応をし、感染管理の意識が高まったと評価していた。1施設は、排せつ援助における物品管理の向上などの変化を評価していた。

参加者に終了後アンケートを実施したが、全員グループワークに対して、内容は適切であり、満足であったと回答をしていた。

教育プログラム実施を通して、グループワーク形式をとったことで、他の参加者や感染看護の専門家から根拠を含めた意見やアドバイスをもらうことができ、他の施設の対応を参考に協議する中で、自分だけでは見出すことができない課題や取り組みに気づくことができていたと考える。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 0件)

[学会発表](計 2件)

松田千登勢、山地佳代、佐藤淑子、金原京子、小川宣子、田中真佐恵、吉井輝子、特別養護老人ホームにおける感染管理教育プログラムの評価、第37回日本科学学会学術集会、2017年12月16日

Chitose Matsuda, Kayo Yamaji, Yoshiko Sato, Kyoko Eguchi, Tayo Nagahata, Development of Infection Control Indicators for Nurses at Nursing Homes, 21st East Asian Forum of Nursing Scholars & 11th International Nursing Conferences, 2018, 1, 12

6. 研究組織

(1)研究代表者

松田 千登勢 (MATSUDA CHITOSE)
摂南大学 看護学部・教授
研究者番号：70285328

(2)研究分担者

山地 佳代 (YAMAJI KAYO)
大阪府立大学 看護学部・講師
研究者番号：80285345

佐藤 淑子 (SATO YOSHIKO)
大阪府立大学 看護学部・准教授
研究者番号：40249090

江口 恭子 (EGUCHI KYOKO)

大阪府立大学 看護学部・助教
研究者番号：10582299
(平成27年度まで)

長畑 多代 (NAGAHATA TAYO)
大阪府立大学 看護学部・教授
研究者番号：60285327

小川 宣子 (OGAWA NORIKO)
摂南大学 看護学部 講師
研究者番号：60737469

田中真佐恵 (TANAKA MASAE)
摂南大学 看護学部 助教
研究者番号：40608543

吉井 輝子 (YOSHII TERUKO)
摂南大学 看護学部 助教
研究者番号：10749633

金原 京子 (KINBARA KYOKO)
摂南大学 看護学部 講師
研究者番号：20454738
(平成28年度まで)